

A2-2. 琉球方言新資料を使った上代特殊仮名遣いの検討 ジュゼッペ・パッパラルド (ナポリ東洋大学大学院)

本研究は、上代日本語に再建されている音韻的対立が現代琉球方言に残存しているかという問題を、北琉球の加計呂麻方言および南琉球の波照間方言の新資料をもとに考察し、上代語と琉球方言の歴史的関係に新解釈を提案する。これまで 8 世紀の文献における万葉仮名の用法の分析から上代語の音韻体系の再建を試みた研究が多くなされ、とりわけ母音体系については様々な仮説が提案されてきた。大野 (1980) や森 (1981) の説では、上代特殊仮名遣いに反映している音韻構造は 8 母音からなり、平安時代に母音外縁化による融合があつて 5 母音体系になったとする。一方、服部 (1976) や松本 (1984) の説では、8 世紀の文献におけるイ段とエ段の音節の書き分けに関与している特徴は頭子音の口蓋化であるとする。これら従来の議論を踏まえて、本研究では、上代語の *ki という音節とオ段の音節に焦点をあて 2 方言の分析を行った。波照間方言の甲類の ki は摩擦化して si になった場合が多い。それに対して上代語の乙類にあたる ki は摩擦化せず、ki および ki で現れる。一方、加計呂麻方言では、乙類にあたる ki だけで母音が中舌母音になった場合が見られる。波照間方言および加計呂麻方言の音変化を説明するには、上代語のイ段の甲乙の交替に関与している特徴は口蓋化であるとする説が妥当であると本研究では解釈する。多くの琉球方言では高母音化の影響で全ての *o は u になったが、加計呂麻方言では o を持つ単語が多く見られる。名嘉真 (1998) は、大勝方言で見られる同様の事実について、全てのオ段音が一度 u になり、のちに一部の u が弱化によって o になったとする。しかしながら、o の音節は圧倒的に甲類にあたる音節であり、また波照間方言においても o を保っている音節は甲類にあたる。よって本研究では、両方言で o が保持されている語は上代語の甲乙の交替を反映していると解釈する。

A2-3. 有声阻害重子音の音声実現における地域差に関する予備的分析

松浦年男 (北星学園大学)

本発表では、キッズ /kizzu/ における /zz/ やバッグ /baggu/ における /gg/ といった有声阻害重子音が音響音声学的にどのように実現するかについて検討した。Kawahara (2006) など示されているとおり、東京方言では閉鎖区間の前半にのみ声帯振動が見られる。標準語において有声阻害重子音は外来語にのみ見られるが、地域によっては漢語や固有語と思われる語種にも見られる。例えば、天草本渡方言ではスッバイ (するだろう)

やアッダケ (あるだけ) といった表現がある。漢語や固有語において有声阻害重子音があるというのは、これらの地域で有声阻害重子音の音声実現が東京方言におけるそれと異なるという可能性が考えられる。そこで、漢語や固有語に有声阻害重子音の見られる長崎方言 (長崎県長崎市)、天草本渡方言 (熊本県天草市)、佐賀西部方言 (佐賀県神埼市) を対象に当該音声の音響分析を行った。分析は、重子音の区間におけるボイスパーを視認により観測し、閉鎖区間の持続時間を計測した。分析の結果、ボイスパーに関しては、長崎方言、天草本渡方言では重子音の閉鎖区間の全体にわたって観察された。佐賀西部方言では東京方言と同じく閉鎖区間の前半部分にのみ声帯振動が観察された。単子音と重子音の持続時間の比率に関しては、長崎方言では 1:2.88 (d と dd)、天草本渡方言では 1:2.62 (b と bb)、1:3.97 (d と dd)、佐賀西部方言では 1:1.94 (d と dd) であった。有声阻害重子音の調音について、声帯振動に関して地域差が見られた。また、持続時間に関して、東京方言との間に明確な差が見られなかった。これらのことは、声帯振動が重子音全体に見られたことと閉鎖時間の長さが独立に決まることを示唆する。

B1-1. ベトナム語母語話者の日本語音声における喉頭の緊張

金村久美 (名古屋大学)
松田真希子 (金沢大学)
磯村一弘 (国際交流基金)
林 良子 (神戸大学)

ベトナム語母語話者の日本語音声は、自然さ、わかりやすさ、聞きやすさなどの点で様々な問題が報告されている。その中で、喉頭の緊張に端を発すると考えられる、音声の不自然な途切れやきしみ音の発生についてはこれまでに詳しく報告されていない。そこで本研究では、ベトナム語母語話者の日本語音声データを用いてこれらの音声の出現状況を観察し、その原因を分析する。ベトナム語を母語とする日本語学習者の音声データとして、日本語の読み上げと自由発話の 2 種類の音声を採用し文字化した。ベトナム語母語話者の日本語音声において喉頭の緊張に起因する音声特徴を、声門閉鎖ときしみ音 (creaky voice) の 2 種類に分類し、これらが聴覚的に観察される部分にタグ付けを行った。その結果、声門閉鎖は、拍と拍の間、無声閉鎖音である頭子音の前、学習者にとって発音しにくいとみられる音の前のいい淀みなどにおいて頻発すること、きしみ音は、いい淀みやフィラーに伴って頻発に生じることがわかった。また、2 種類の音声データのうち自由発話において、声門閉鎖やきしみ音の出現頻度がより高いことがわかった。これらの音声